

《速報》二子山古墳墳丘造出しの調査について

－平成29年度 発掘調査成果を中心として－

中井 歩

1. はじめに

二子山古墳は、埼玉県行田市に所在する埼玉古墳群の前方後円墳のひとつである。埼玉古墳群は、現存する8基の前方後円墳と1基の大型円墳をはじめとして、かつては40基を超える大小の古墳で構成されていた。埼玉県では昭和42年度から埼玉古墳群の整備を開始し、現在も発掘調査や整備事業を続けている。そのなかで、稻荷山古墳出土の鉄剣から115文字の銘文が発見されるなど、日本の古代史を考えるうえで非常に重要な成果を出してきた。

二子山古墳は墳丘が132.2mに及び、武藏国で最も大きな前方後円墳とされる。昭和42(1967)年度に発掘調査が開始され、その後も断続的に調査が行われてきた。平成29(2017)年度には墳丘造出しと後円部の調査を実施し、特に墳丘造出しについて大きな成果を得られた。そこで、本稿では速報として二子山古墳の墳丘造出しの調査成果を報告する。整理作業は現在も進行中であり各所に不十分な部分が残っているが、なるべく早く概要を公表することで調査成果に関する議論が進み、二子山古墳や埼玉古墳群の理解が深まることを期待している。

2. 二子山古墳における過去の発掘調査及び整備工事について

二子山古墳の発掘調査は昭和42年度に始まる。昭和42年度の調査では周堀を中心に40を超えるトレンチが設定され、前方部の付け根に造出しがあること、二重の周堀をもつこと、中堤にも造出しがあることなどが確認された。この時の墳丘造出しの調査は部分的なものに留まり、「全容は不明だが、楕円状の平面プランで、幅は約20m、弧状に9m前後突出するもの」とまとめられている。また、墳丘造出しが前方部のくびれ部寄りに付設されている点が、埼玉古墳群では

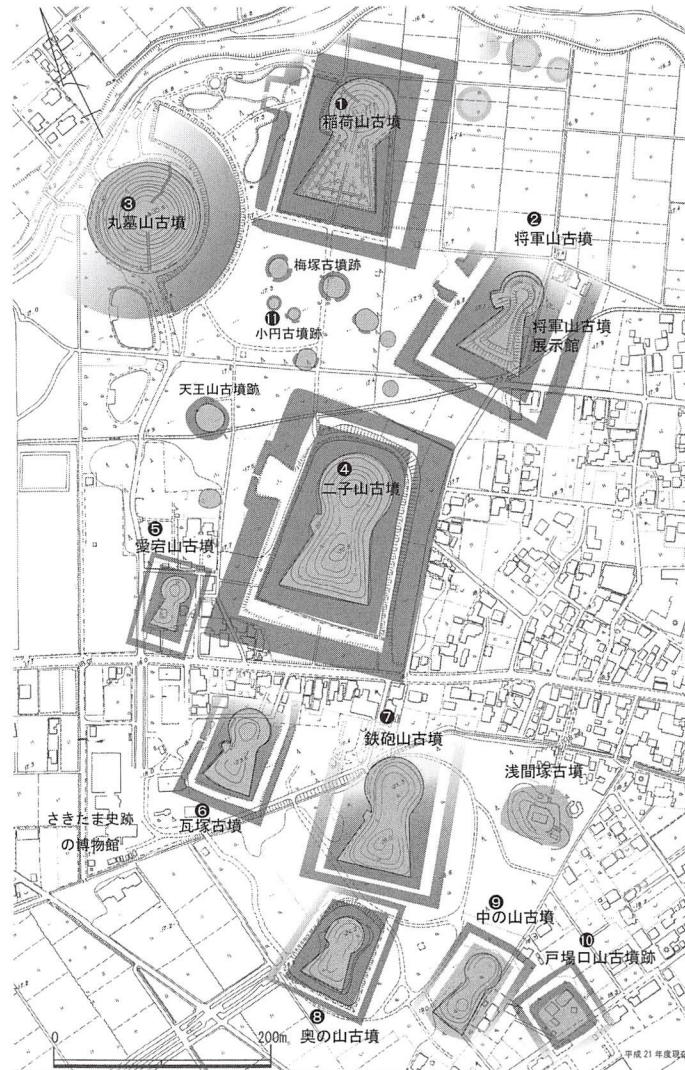


図1 二子山古墳の位置

瓦塚古墳と類似することが指摘されている(杉崎ほか1987)。

昭和43(1968)年度には復原工事が行われ、内堀が「水堀」として整備された。その後、昭和49(1974)年度、昭和55(1980)年度、昭和59(1984)年度、平成2(1990)年度に、民有地の公有地化などに伴い、外堀・内堀・中堤の部分的な調査が実施された(杉崎ほか1987・若松ほか1992)。

「水堀」として整備された内堀は、長年の水位変動により墳丘へ影響を及ぼし、平成18(2006)年度には墳丘の亀裂と小崩落が確認された。平成19(2007)年度にも再崩落が発生したため、東側くびれ部を対象とした内堀護岸工事を実施した(井上2009)。しかし、墳裾全域及び内堀法面の崩落の可能性が高いことから、平成24(2012)～26(2014)年度に内堀埋立工事を実施した(佐藤2015)。

内堀埋立工事と前後して、墳丘の崩落状況と古墳の正確な規模、形態を把握することを目的に、平成25(2013)、27(2015)、28(2016)年度に発掘調査を実施した。平成25年度には、これまで発掘調査が行われていなかった前方部の墳丘を調査し、中世の墓地によって墳丘形態が改変されていることが確認された(岩田2013)。平成27年度の調査では、北東側の外堀のコーナー部を確認し、本来の周堀が現在復原されている後円部に沿った形状とは大きく異なることが明らかとなった。また、後円部・前方部それぞれの墳裾が調査されたことにより、従来138mとされてきた墳長が132.2mであったことが判明した。このように近年の発掘調査により、二子山古墳の規模や形態が昭和43年に整備された現況とは異なることが明らかとなってきた(埼玉県教育委員会2018)。

3. 平成29年度の発掘調査について

平成29年度は墳丘造出しと後円部の二箇所を調査したが(図2)、今回は墳丘造出しのみを報告する。二子山古墳の墳丘造出しが昭和42年度の調査成果を受けて、昭和43年度に盛土により半円形に復原整備された(図3・4)。しかし、昭和42年度の調査範囲は造出しの一部であり、墳丘造出しの全体的な規模や形態、残存状況については課題が残されていた。そこで平成29年度は、昭和42年度よりも調査範囲を広げ、墳丘造出しの全貌を明らかにすることを目的として発掘調査を実施した。

3. 1 墳丘造出し残存状況と形態

調査の結果、約9m×約15mの範囲で墳丘造出しが残存していることが明らかとなった(図5・6)。造出しが2段からなり、上段は約6m×約9mの方形を呈する。下段は約5m×約12mが残存しているが、北西側が削平されている。削平面に接するように後世の溝が通っており、この溝を掘る際に墳丘造出しが削平された可能性が考えられる。また、溝に接して半円形のプランが検出された。二子山古墳の内堀は昭和43年度の「水堀」整備の際に掘削されており、このプランはその掘削によるものと想定される⁽¹⁾。現況の墳丘造出しが、この半円形プランをもとに復原されていたが、今回の調査で墳丘造出しが2段からなること、上段は方形であることが明らかとなった。

このような調査成果を踏まえ、二子山古墳の墳丘造出しの形態について再検討する必要がある。昭和42年度の調査成果が記載された報告書には「全容は不明だが、橢円状の平面プランで、

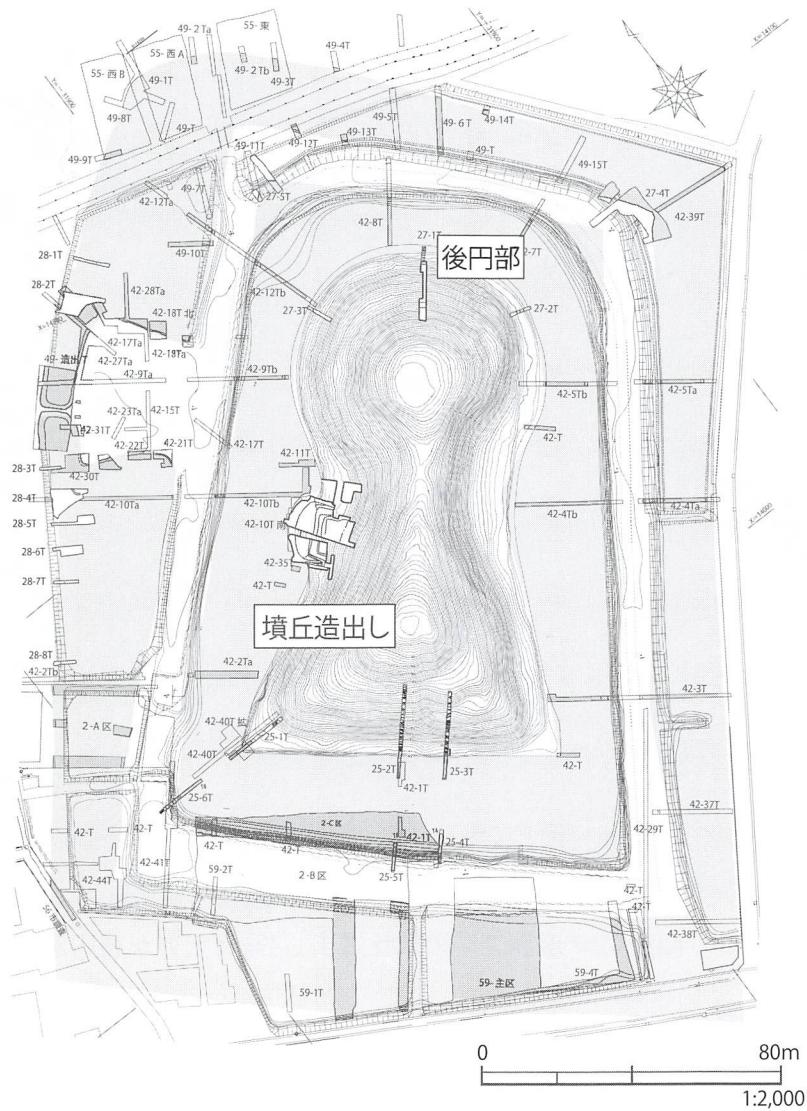


図2 平成29年度二子山古墳調査区

幅は約20m、弧状に9m前後突出するもの」と記述されている(杉崎ほか1987)。一方で、昭和42年度の調査日誌には造出しプランの略図が描かれており、そこでは丸味をおびた角をもつ形態が表現されている。さらに、今回の調査で造出しが二段から成り、上段は方形プランをもつことが明らかとなった。つまり、調査日誌や上段の形態からは下段も築造当初は方形を呈していた可能性も想定することが出来る。また、二子山古墳の造出しへは前方部のくびれ部寄りに位置する。埼玉古墳群では稻荷山古墳・將軍山古墳・奥の山古墳のように後円部に造出しが付設する事例が多いが、二子山古墳の南に位置する瓦塚古墳は前方部のくびれ部寄りに造出しが位置している。瓦塚古墳の造出しへは調査の結果、角に丸味をおびた方形であることが明らかとなつておらず、両者は位置だけでなく形態も類似していた可能性がある(図7)。

また、調査区の一部では墳丘と造出しの接合部を確認することができた。墳丘と造出しでは土の性質が大きく異なる。墳丘が粘性の強い黒色土を強く固めて築造されているのに対し、造出しはロームブロックを多く含む土で構成されており非常にもろい。そのためか、現状では造出しの上段と下段の段差は曖昧になっている。特に上段は非常に崩れやすく、土が流れてしまった可能性がある。



図3 昭和42年度調査時の墳丘造出し(写真上方が後円部)



図4 平成29年度調査前の墳丘造出し(写真左側が後円部)



図5 墳丘造出し全景

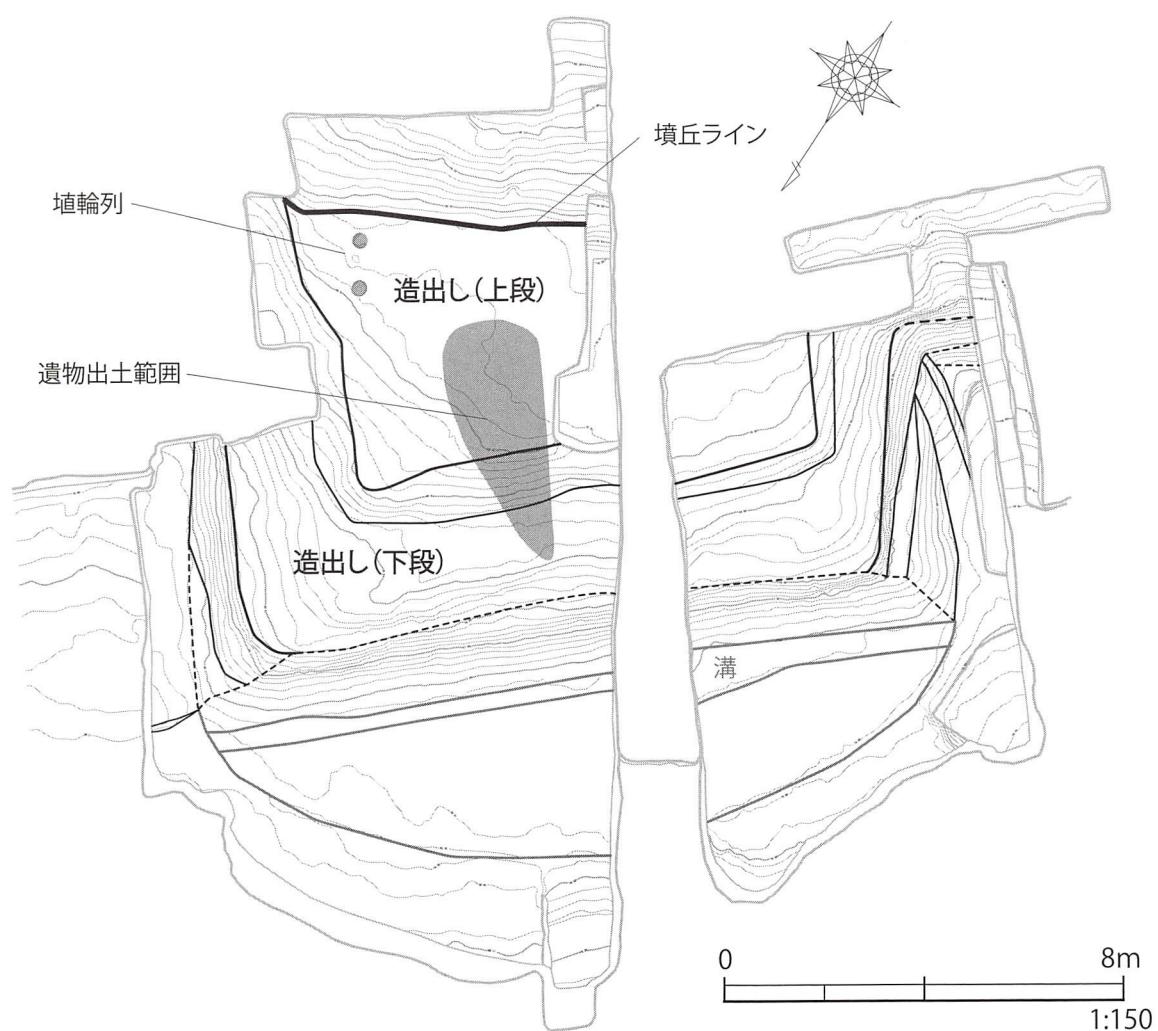
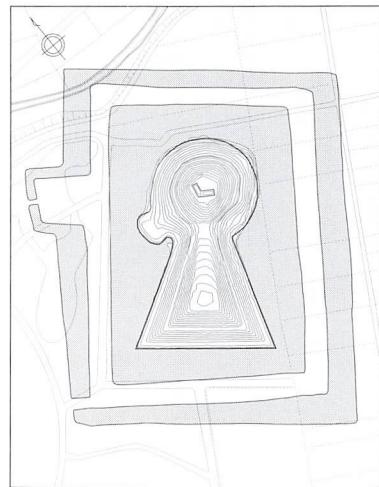
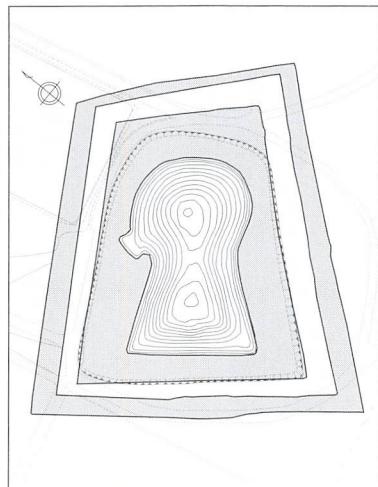


図6 墳丘造出し測量図

後円部に墳丘造出しをもつ古墳



稻荷山古墳

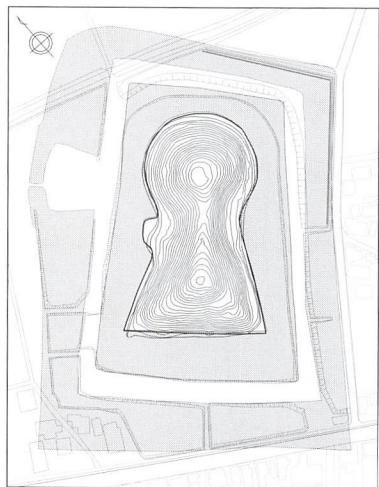


奥の山古墳

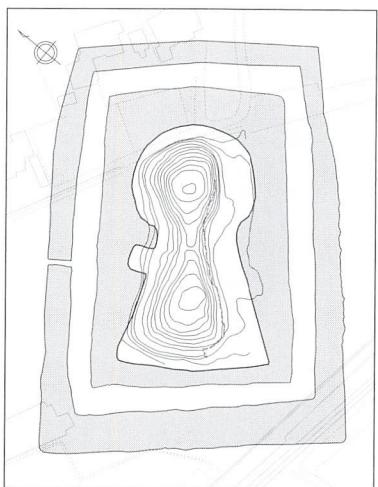


将軍山古墳

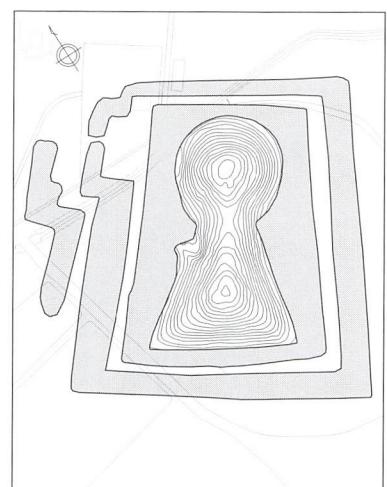
前方部に墳丘造出しをもつ古墳



二子山古墳



瓦塚古墳



鉄砲山古墳

図7 埼玉古墳群の墳丘造出し

3. 2 墳丘造出し出土遺物について

今回の調査で墳丘造出しから土師器・須恵器・埴輪が多量に出土した。特に、上段の中央からやや北東よりの地点から土師器と須恵器が集中して出土している(図8)。天地が逆転したり、横に倒れた状態で出土したりしたものが多く、底部が床面に据えられた状態で出土したものはほとんどない。須恵器の蓋坏には複数が重なった状態で出土したものもある。土師器と須恵器は混在しており、全体として雑然とした印象を受ける。墳丘造出しの土層断面を観察したところ、この場所が後世の攪乱を受けた可能性は低い。一方で、造出しを構築する土が脆く、遺物の出土範囲が造出しの上段から下段に及んでおり、下段は上層、上段は下層に遺物が集中していることから、当初は造出しの上段に積み上げられていた土師器・須恵器が土と一緒に下段に流れてしまったものと考えられる。つまり、造出し上での祭祀は土器を積み上げるように廃棄して終焉したと考えられる。

また、造出しの北端では2点の埴輪が樹立した状態で出土している。上部は残存していなかつたが、造出し上段の端に並べられていた埴輪列の一部と考えられる。

以上、二子山古墳の墳丘造出しあは先端が削平されているものの、遺物の出土状況など当時の実態を良好に残していることが判明した。

出土遺物の整理作業を進めると、土師器の高坏、須恵器の坏身・坏蓋が大半を占めることが分かった(図9-1・2)。これらのなかには完形に近い状態に復元できるものが多くある。正式な数量は今後の成果を待つところであるが、現時点では土師器の高坏が約30点、須恵器の坏身が約10点、坏蓋が約10点確認できる。また、復元作業を進めていくと、底に穿孔を施す須恵器があることが判明した。多くは坏身であるが、1点は坏蓋に穿孔が施されている(図9-3)。祭祀に伴う穿孔行為を伺うことができる。その他の器種としては、須恵器の大甕と提瓶が確認できる(図9-4・5)。しかし破片資料に留まり、上述した器種とは異なり完形に近い状態に復元できるような個体は今のところ認められない。さらに、昭和42年度の調査では磧と考えられる破片が出土し(杉崎ほか1987)、平成2年度には器台の破片が表採されている(若松ほか1992)。

また、多くの埴輪片が出土しているが、大半が円筒埴輪の破片であり、形象埴輪は現時点では確認できていない。

以上から、二子山古墳の墳丘造出しあは端に円筒埴輪が並べられ、その内側に土器が集積されていたと考えることができる。土器は、土師器の高坏、須恵器の坏身・坏蓋が主体であり、須恵器の大甕・磧・器台が客体的に含まれる(図10)。このことから、二子山古墳の墳丘造出しあは飲食器を中心とした儀礼が行われた可能性が考えられる。

最後に、墳丘造出しから出土した須恵器の時期について若干触れておきたい。図11に今回の調査で墳丘造出しから出土した須恵器の坏身・坏蓋を示した。これらについて、現在の見通しでは、TK10型式の古相前後という見解を得ている。これまで、二子山古墳出土の須恵器はわずかな小片が確認されるのみであったが、その年代はMT15型式まで遡る可能性が指摘されていた。つまり、墳丘造出しあ出土の須恵器については、従来考えられてきた二子山古墳出土土器の時期よりも新しい傾向にあるといえる。

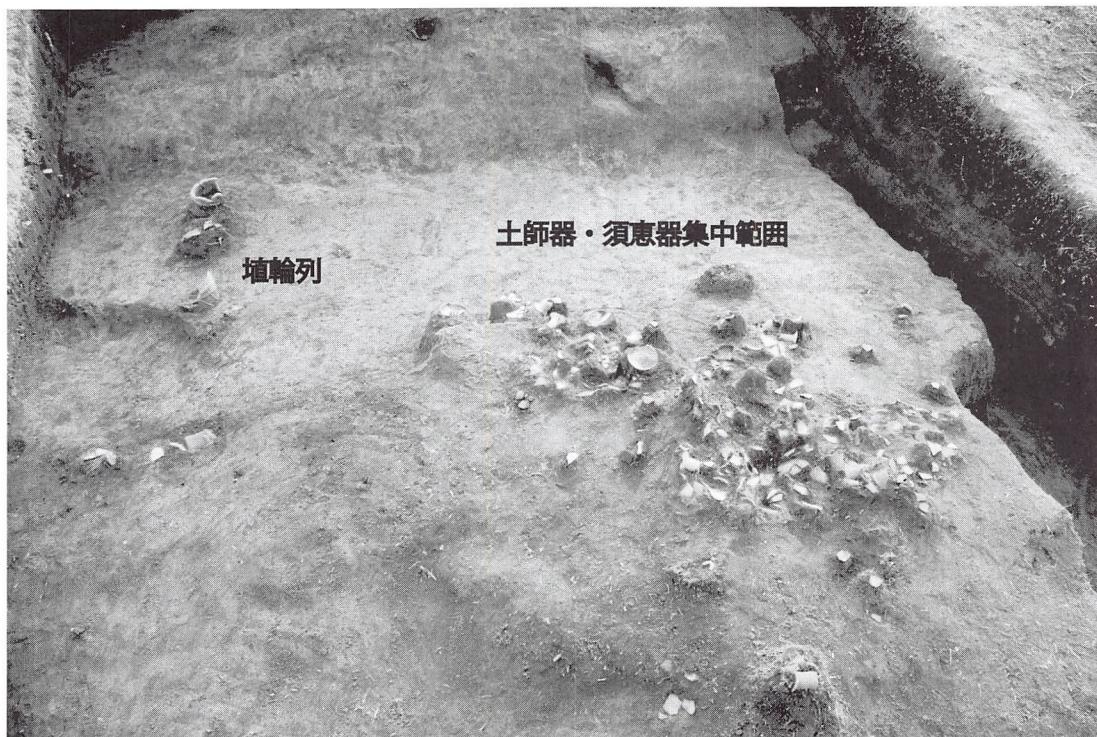


図8 墳丘造出し遺物出土状況

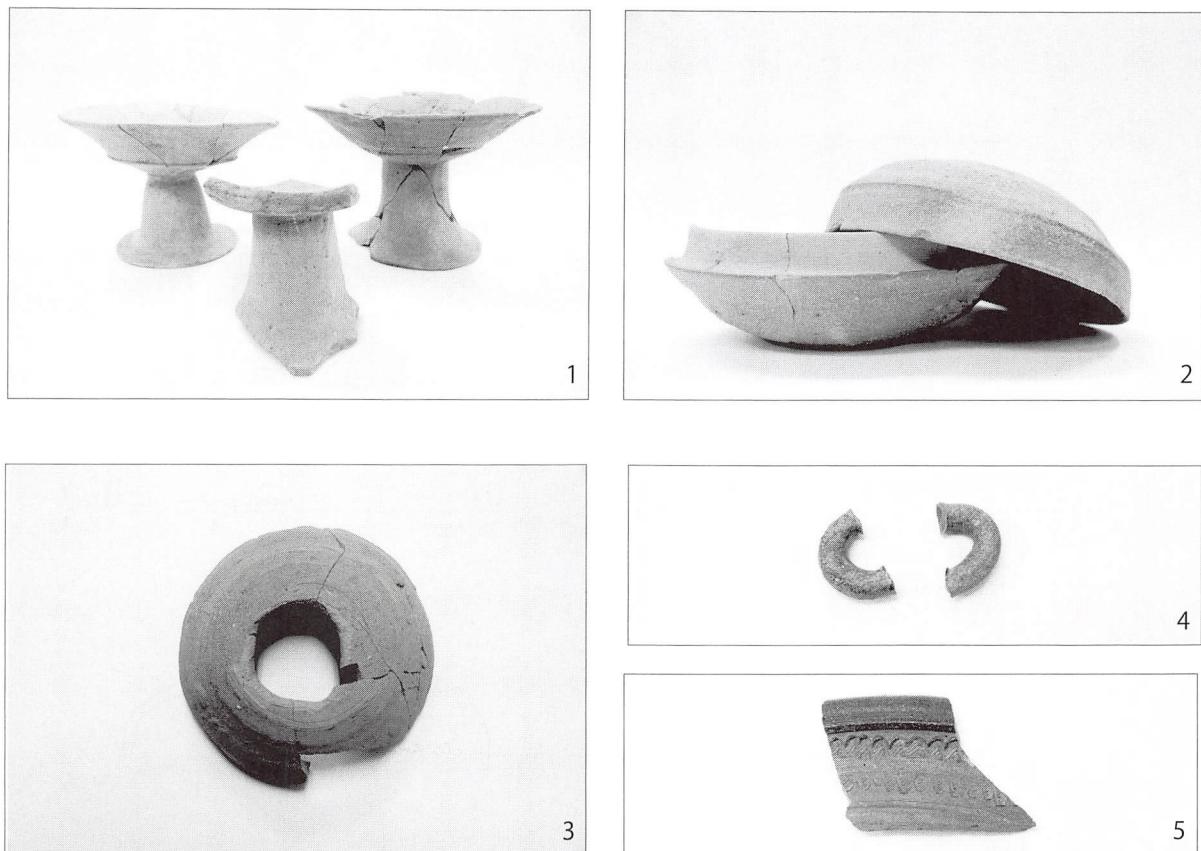


図9 墳丘造出し出土遺物

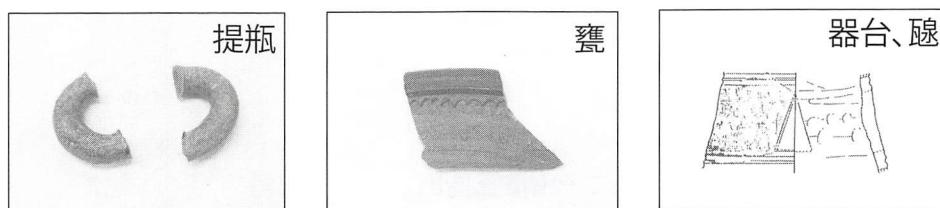


図10 二子山古墳 墳丘造出し出土遺物の構成

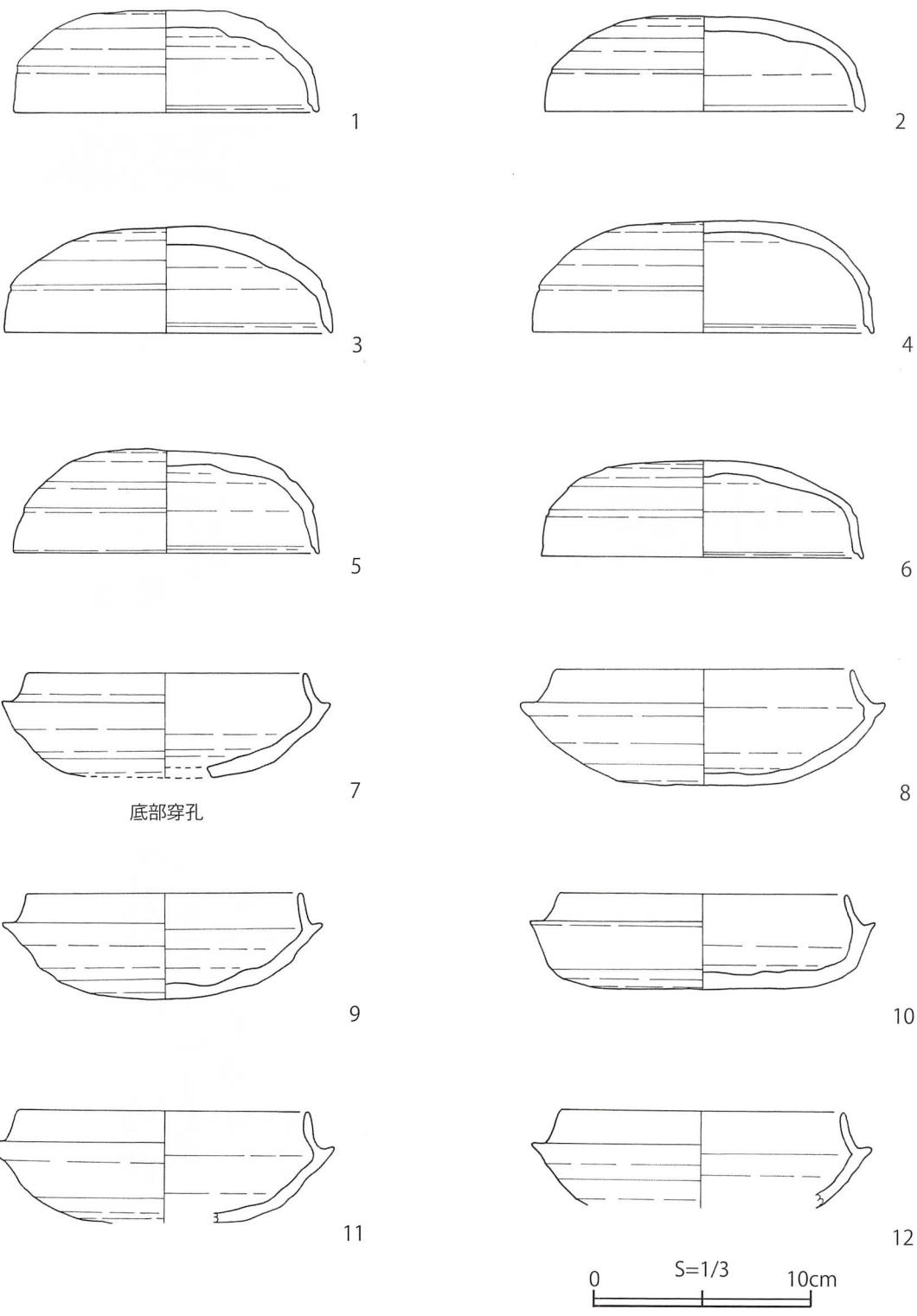


図11 二子山墳丘造出し出土須恵器

4. 埼玉古墳群の墳丘造出しについて

埼玉古墳群ではこれまで稻荷山古墳・瓦塚古墳・奥の山古墳・将軍山古墳で墳丘造出しの調査が行われた⁽²⁾。そこでこれらの成果を整理し、二子山古墳の墳丘造出し、埼玉古墳群の墳丘造出しの特質について考えていただきたい。これまでの調査成果や出土遺物については、各古墳の発掘調査報告書(若松1990・2007、岡本1997、佐藤2014)や藤野一之氏・酒井清治氏の論考(藤野2016、酒井2018)に詳しくまとめられている。そのなかで指摘されているのが、①発掘調査が行われたすべての墳丘造出しで土器が出土していること、②出土土器は須恵器が主体であること、③時期によって須恵器の器種組成に違いがあること、④形象埴輪を出土する古墳と出土しない古墳があること、である。以下、これまでの研究を参考にして埼玉古墳群の墳丘造出しから出土した土器と埴輪の種類を簡単にまとめる。

稻荷山古墳(図12)

須恵器の有蓋高壺が主体となる。その他の器種も含めて、須恵器が多くを占めており、土師器は壺と甕がわずかに認められるのみである。一方、中堤造出しや中堤では土師器が主体となって出土しており、同一の古墳内でも場所によって土器の種類が異なることが指摘されている(藤野2016)。

埴輪については、円筒埴輪で区画されていたと考えられている。また、造出し付近の内堀から出土した形象埴輪片はわずかであり、それらは造出しではなく墳頂部から転落した可能性が想定されている(若松ほか2007)。

瓦塚古墳(図12)

須恵器と土師器とともに出土しているが、須恵器が主体である。甕が多く、提瓶もあることから貯蔵具が主体となる傾向が指摘されている(藤野2016)。また、三角形の透かしを持った器台も特徴的である。土師器は壺や小型の壺が出土している。

埴輪については、円筒埴輪の破片が大量に出土しており円筒埴輪列の存在が想定される。一方で、形象埴輪の存在は記述されておらず、墳丘造出しには形象埴輪が並べられていなかったと考えられる。瓦塚古墳では西側の中堤で豊富な種類をもつ形象埴輪列が確認されており、対照的な様相を示している。

奥の山古墳(図13)

須恵器が出土しているが、土師器は今のところ確認されていない。装飾付壺と高壺形器台が特徴的である。

埴輪は円筒埴輪と形象埴輪とともに破片が大量に出土している。小片が散在した状態で出土しており、原位置の復元は難しいが、円筒・形象両者を含んだ埴輪列の存在が想定される。形象埴輪は人物、馬、家、器財など多岐にわたる。

将軍山古墳(図14)

須恵器と土師器の両方が出土するが、須恵器が主体である。高壺や器台は認められず、甕や、

提瓶・壺・甕などの液体貯蔵具が中心であることが指摘されている（藤野2016）。土師器は壺のみ出土している。将軍山古墳は埼玉古墳群内で唯一横穴式石室の副葬品が判明しているが、土器は須恵器の無蓋高壺のみであり墳丘造出しに比べ石室への土器の副葬は低調であったことがうかがえる。

埴輪は円筒埴輪だけでなく形象埴輪も出土しており、靱や盾などの器財埴輪がみられる。

以上、簡単ではあるが各古墳の墳丘造出し出土遺物の組成を概観した。これらと二子山古墳の調査成果をまとめたのが表1である。多くの古墳が須恵器を主体とするのに対し、二子山古墳では土師器の高壺の割合が多いのが特徴的である。また、他の古墳では須恵器・土師器とともに壺類が少ないのでに対し、二子山古墳では須恵器の壺が多い点も指摘できる。

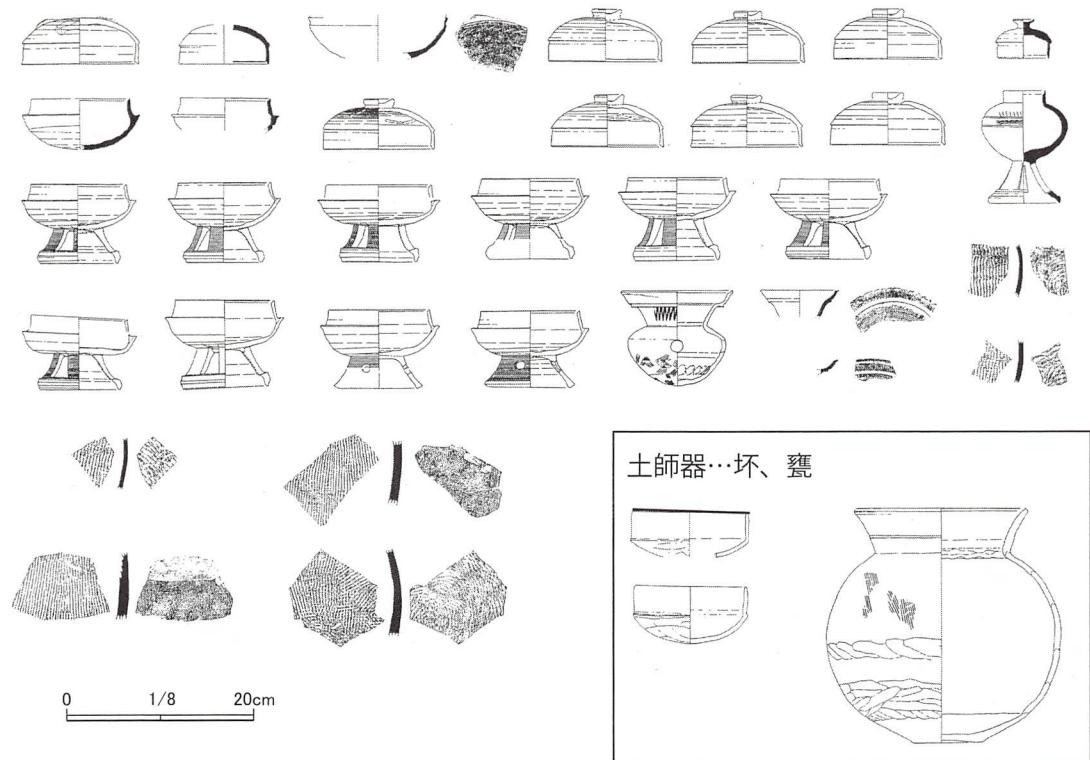
このような特徴から、二子山古墳の墳丘造出し出土遺物は埼玉古墳群の他の古墳に比べて異彩を放っているかのようにみえる。一方で、その他の古墳に関しても主体が須恵器であることは共通するが、その内容は古墳ごとに異なることが指摘されている（藤野2016、酒井2018）。さらに、形象埴輪の有無も古墳によって異なっており、埼玉古墳群の墳丘造出しは各古墳によって異なる様相を示していることが分かる。つまり、二子山古墳のみが特異的な特徴を持っているのではなく、古墳群内の多様性の一端が表れていると理解することも可能なのである。

表1 埼玉古墳群における墳丘造出し出土遺物の構成

古墳名	出土土器	形象埴輪
稻荷山古墳	須恵器主体	×?
	有蓋高壺	
二子山古墳	土師器／須恵器	×
	土師器高壺、須恵器蓋壺	
瓦塚古墳	須恵器主体	×
	提瓶、器台	
奥の山古墳	須恵器主体	○
	装飾付壺、器台	
将軍山古墳	須恵器主体	○
	甕	

■ 稲荷山古墳

須恵器…坏蓋、坏身、無蓋高坏、有蓋高坏、醴、有蓋脚付小壺、甕



■ 瓦塚古墳

須恵器…無蓋高坏、提瓶、器台、甕

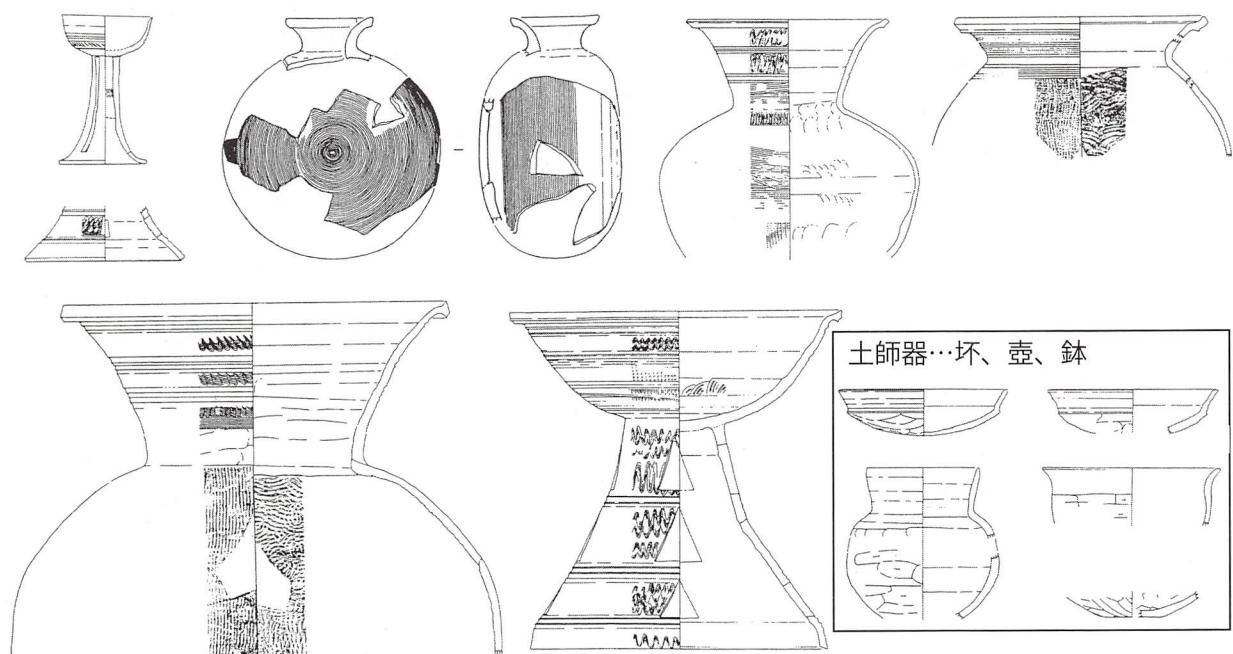


図12 埼玉古墳群墳丘造出し出土遺物①

■ 奥の山古墳

須恵器…壺蓋、壺身、無蓋高壺、醴、壺、裝飾付壺、提瓶、器台、甕

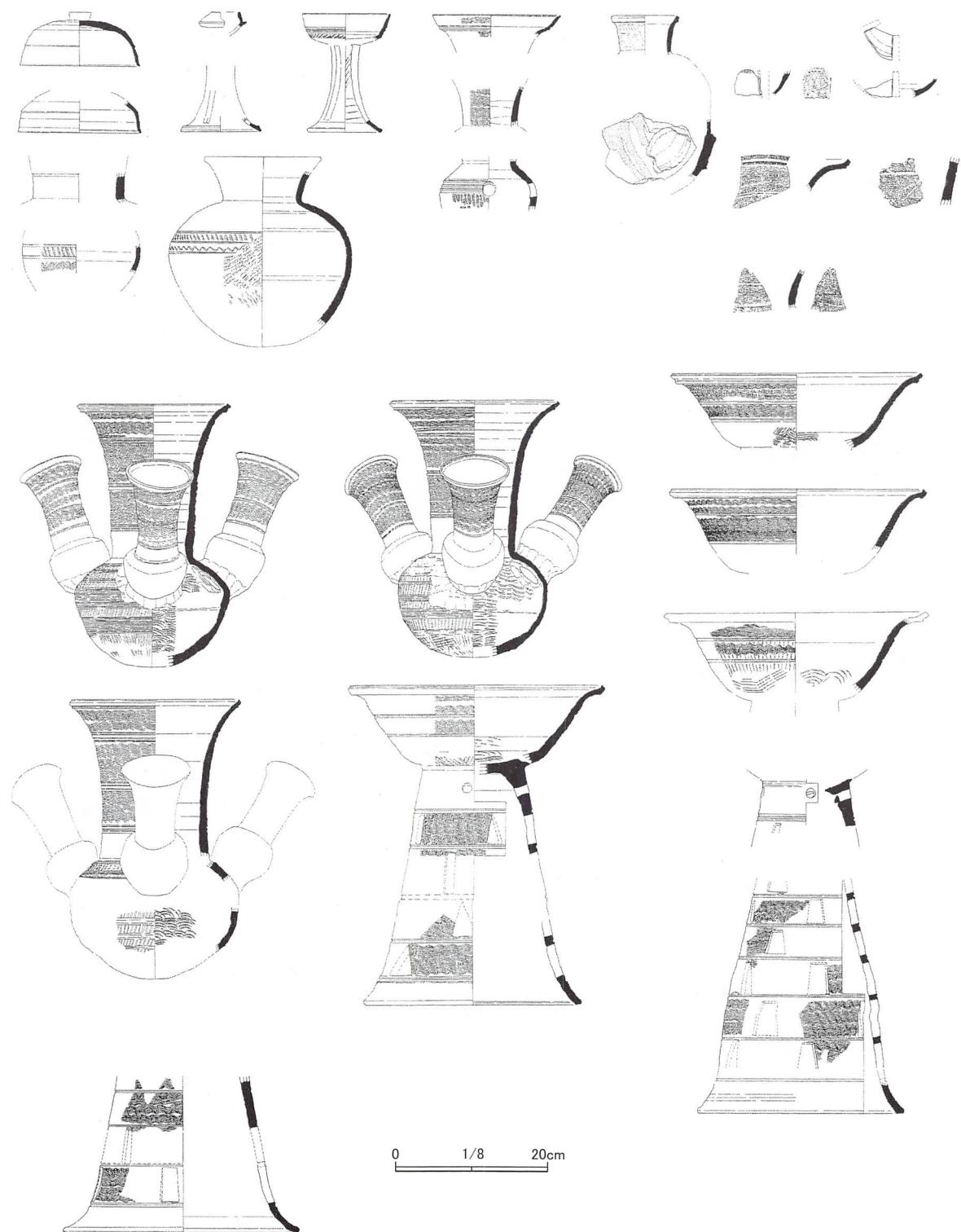


図13 埼玉古墳群墳丘造出し出土遺物②

■ 将軍山古墳

須恵器…罐、提瓶、有蓋壺、台付壺、甕

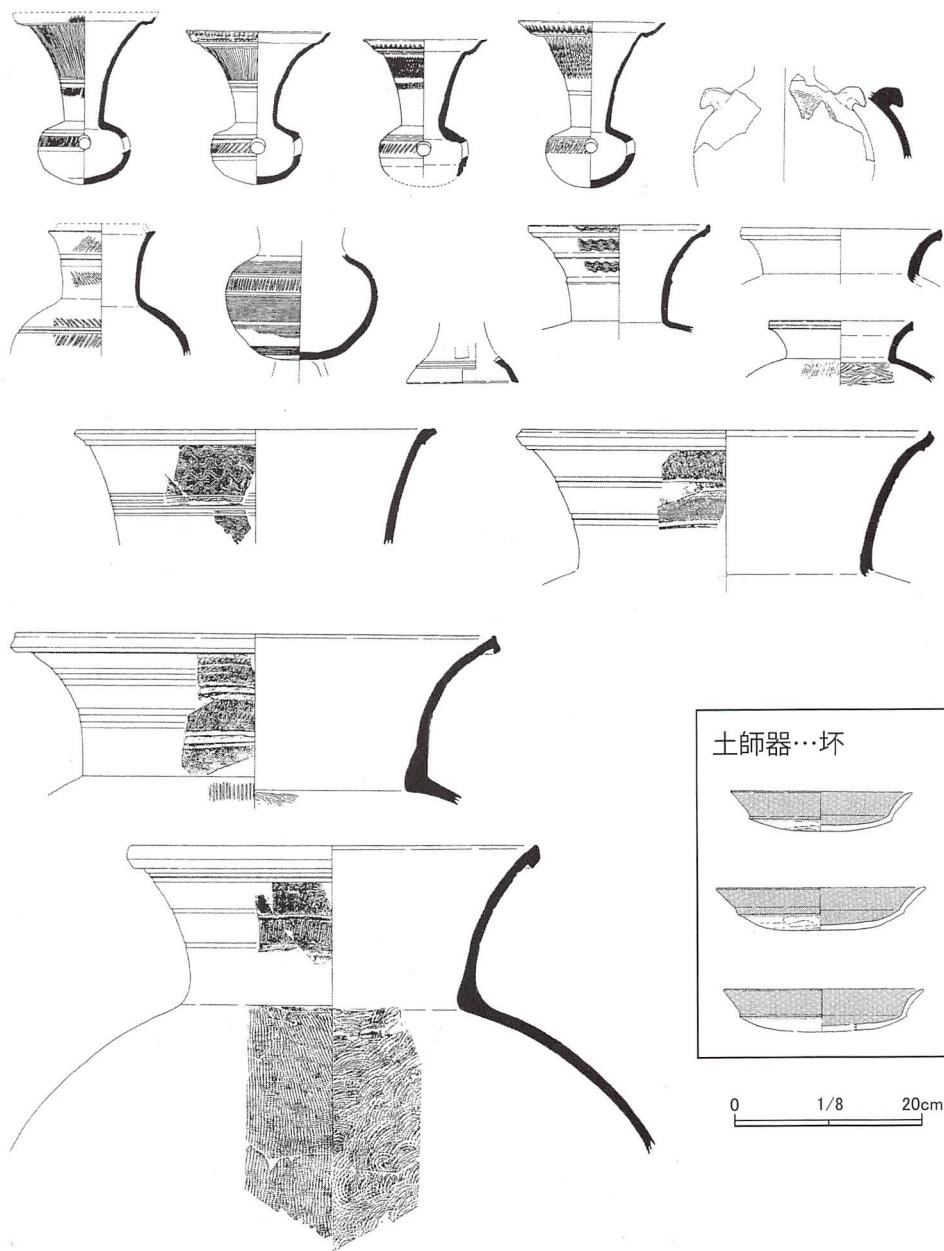


図14 埼玉古墳群墳丘造出し出土遺物③

6. おわりに

以上、墳丘造出しに焦点を当てて、二子山古墳の平成29年度発掘調査の概要を述べてきた。以下、いくつかの課題を述べて、本稿の締め括りとしたい。

まず二子山古墳の墳丘造出しの形態の問題があげられる。墳丘造出し下段の先端は大きく削平されていたため、今回の調査では墳丘造出しの全体の形を遺構として検出することはできなかった。墳丘造出しの形態を①昭和42年度の調査成果を踏まえた報告書(杉崎ほか1987)の「橿円状」のプランと考えるのか、②今回の調査で明らかとなった上段の形態や昭和42年度調査日誌に描かれた略図や瓦塚古墳との共通性から想定した隅丸の方形プランとえるのか、これは今後二子山古墳の整備事業を進めるためにも重要な課題であり慎重に検討を続ける必要がある。今後、墳丘造出し周辺の発掘調査を実施する予定であり、さらに全国的な視点で墳丘造出しの検討を進めながら議論を続けていきたい。

次に、二子山古墳の墳丘造出しから出土した須恵器の時期の問題である。今回出土した須恵器はTK10型式古相の様相を示し、従来考えられてきた二子山古墳出土須恵器の年代観よりも新しいものであった。これは二子山古墳の築造時期に関わる重要な問題である。これまで、二子山古墳の築造時期はわずかな出土遺物に加えて、5世紀末から6世紀初頭に降下した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)の存在が示唆されていたことから、6世紀初頭前後と考える説が多く出されていた。一方、埴輪の検討などから6世紀前半に位置づける見解もあった。平成29年度の調査では6世紀前半の須恵器が出土したが墳丘造出しからの出土であり、古墳の築造時期と同時期であるのかという問題も残される。この点も踏まえて、二子山古墳の築造時期やその位置づけについて、さらなる調査研究を進めていく必要がある。

次に、古墳の墳丘造出しの出土遺物に関する問題である。埼玉古墳群では8基の前方後円墳のうち5基で墳丘造出しから土器の出土が確認されており、これらの古墳では墳丘造出で土器を使用した祭祀が行われたと考えられる。一方で各古墳の墳丘造出し出土遺物は多様な様相を示しており、祭祀の内容も各古墳によって異なっていた可能性がある。これまでの研究では、この差異を時期による祭祀内容の変化と捉えていたが(藤野2016、酒井2018)、二子山古墳の墳丘造出し出土遺物の全体像が明らかになったことでこの問題について再検討する必要性が出てきた。二子山古墳の墳丘造出し出土遺物の時期は6世紀前半であり、瓦塚古墳や奥の山古墳と同じくらいの時期にあたる。しかし、各古墳の墳丘造出し出土遺物の構成は大きく異なっており(図12・13、表1)、時期差以外の要因が考えられる。このことから、埼玉古墳群の墳丘造出出土遺物の多様性は、時期による変化以外の背景も含めて理解する必要があるのではないだろうか。それが何に起因するものなのか、今回は筆者の力不足によりそこまで追求することができなかった。今後の課題としたい。また、これまで埼玉古墳群では8基の前方後円墳で、①墳丘がほぼ南北を向く、②二重の長方形周堀をめぐらす、③西側に墳丘造出しを有する、といった共通性が強調してきた。ただし、埋葬施設に関しては、稻荷山古墳は礫槻と粘土槻、奥の山古墳は箱式石棺、將軍山古墳は千葉県の房州石を用いた横穴式石室、鉄砲山古墳は群馬県の角閃石安山岩を用いた横穴式石室といったように多様性を示すことも指摘されていた。今回二子山古墳の墳丘造出しの全貌が明らかになったことにより、埼玉古墳群における墳丘造出しの

多様性が一層際立つこととなった。このように古墳群において、共通性が重視される一面と多様性が認められる一面があることは何を意味しているのであろうか。この問題は古墳群の理解にとって重要であると考えている。さらに、埋葬施設の副葬品が判明しているのが稻荷山古墳と將軍山古墳の2例に限られるのに対し、墳丘造出しに関しては5基(未整理の鉄砲山古墳を含めると6基)の前方後円墳で出土遺物の詳細が判明している。つまり、墳丘造出しの検討は、埼玉古墳群の理解にとって、新たな視点となりうるのではないかと考えている。各古墳で具体的にどのような祭祀が行われたのかという点も含め、各古墳の詳細や全国の古墳群との比較を進めていきたい。

最後の課題は二子山古墳の調査報告書の刊行である。二子山古墳の調査は近年では、平成25、27～30年度に実施されている。各年度で重要な成果が出ており、年度によっては遺跡発掘調査報告会の資料で概要が報告されているが(岩田2013・中井2018)、まだ紙面に登場していない成果も多い。また、埼玉古墳群内のその他の古墳についても同様の状況に陥っているものがある。その背景には様々な事情があるが、発掘調査の成果は公表され、多くの人の目にさらされることによってより議論を深めていかなければならない。また、最新の調査成果を発信することは博物館の業務としても不可欠ではないだろうか。内容が不十分であるにも関わらず本稿の執筆を急いだ背景にはこのような思いがあった。自戒の念を込めて、調査の正式な報告書の速やかな刊行を今後の大きな課題としてあげておきたい。

以上、多くの課題を残したが当初の「調査成果を公表する」という目的だけは達成できたかと思う。内容については不十分な点が多く残っているが、今後の課題としたい。

【註】

- (1)昭和42年度の調査で検出された墳丘造出しのプランを残して掘削した可能性が考えられる。このプランの評価は後述する墳丘造出しの形態を考えるうえで非常に重要である。当時の調査・工事資料を精査する必要があるが、本報告までの課題としたい。
- (2)平成19～28年度に発掘調査が行われた鉄砲山古墳でも、墳丘造出しの調査が行われている。詳細は整理中だが、忍藩の角場(砲術訓練所)遺構が発見されており、後世に改変されていることが分かっている。

【図版出典】

- 図7 各古墳の図面を関2017より引用して作成。
図11 岡本健一氏が実測したものを筆者がトレースして作成。
図12～14 藤野2016より一部改変して引用。

【参考文献】

- 井上尚明 2009 「二子山古墳の内堀護岸整備について」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第3号 埼玉県立史跡の博物館
岩田明広 2013 「行田市埼玉古墳群(鉄砲山古墳・二子山古墳)の調査」『第47回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会・(公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉県立さきたま史跡の博物館
岡本健一 1997 『將軍山古墳史跡埼玉古墳群整備事業報告書—史跡等活用特別事業—』確認調査編・付編

埼玉県教育委員会

埼玉県教育委員会 2018 『史跡埼玉古墳群総括報告書 I』埼玉県教育委員会

酒井清治 2018 「埼玉県古墳群出土の須恵器について」『史跡埼玉古墳群総括報告書 I』埼玉県教育委員会

佐藤康二 2014 『史跡埼玉古墳群奥の山古墳発掘調査・保存整備事業報告書』埼玉県教育委員会

佐藤康二 2015 「二子山古墳の再整備について」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第8号 埼玉県立史跡の博物館

杉崎茂樹ほか 1987 『二子山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第5集 埼玉県教育委員会

関 義則 2017 「埼玉古墳群の成立」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第10号 埼玉県立史跡の博物館

中井 歩 2018 「行田市埼玉古墳群(二子山古墳)の調査」『第51回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会・(公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉県立さきたま史跡の博物館

藤野一之 2016 「土器からみた埼玉古墳群の葬送儀礼とその特質」『埼玉考古』51

若松良一 1990 「造り出し出土の供献土器について—瓦塚古墳の調査から—」『調査研究報告』第3号 埼玉県立さきたま資料館

若松良一ほか 1992 『二子山古墳瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第8集 埼玉県教育委員会

若松良一ほか 2007 『武藏埼玉稻荷山古墳』史跡埼玉古墳群稻荷山古墳発掘調査・保存整備事業報告書
埼玉県教育委員会